

● 発行元として望ましいのは

- × 薬屋:ニュートラルではなさそう。
- × 厚生省:硬い感じ。
- × 外郭団体(名の知れていないもの):本当に有るのか?と疑わしいもののため。
- 医療機関:例えば大学病院の名前。専門的な学会もOK。医師会は医療機関のイメージではない。
- 実際に子供を見ている現場の先生が作っている情報がいい。
- 患者会などで体験談が出ているのは良い。親の視点からの情報も欲しい。

● ※医師に知っておいて欲しいこと

- 薬は怖い。薬の前にできることがあればそのほうがベター
- 頭ごなしに、あれはダメこれはダメと言わないで欲しい。
- 皆が同じパターンではないと言うことを知っていて欲しい

- 有意義な患者インタビューのためにはまず、診療ガイドラインの性格とユーザーを明確にすることが必要である。

今回のインタビューでは「診療ガイドライン」を「患者自身が使うもの」「標準的な診断や治療方針の解説書および暮らしの手引き」と言う位置付けで行った。そのため、小児喘息を抱えて生活する暮らし全般において、現在不足している情報やサポートは何かを探るためのインタビューとなった。

もし今後、治療に関する情報に特化し、医者(一般臨床医?)がメインユーザーと決めるならば、①治療に関して抱えている不安(疑問)、不満 ②医師や病院との関係で抱えている不満 を把握することを中心としたほうが良い。

- 治療的な問題に焦点を置きたいのならば、重度の患者(あるいはその介護者)を対象とする必要がある。

特に小児喘息の場合、成長にともない発どが治るため、病気それ自体に関する親の深刻度はそれほど深くはない。医者への信頼関係がうまく成立している場合、顕在的な不安は発どないというケースもあった。そうすると、特に治療に関する不安や疑問の定性データを収集するためには、インフォーマントとして重度な患者をセレクトする必要がある。

インタビューフローの修正 ご提案

18

● 全体の構成の修正

<今回>

1. イントロ
2. 治療歴と現在困っていること
3. 望まれる情報とそのチャネル
4. 診療ガイドラインに載せて欲しい内容
5. 既存の診療ガイドラインへの評価
(体裁・発行元・編集方法)

<修正案> ※トータル90分で良いかも

1. イントロ・治療歴
2. 現在困っていること、不安や疑問を感じること(治療にフォーカス)
3. 医師や病院に対する不満や不安、医師に知っておいて欲しいこと
4. これまでに役に立ったと感じた情報

● 今回の各ステージの問題点と修正

- [2. 治療歴と現在困っていること]
- 「制約を受けていること」にはあまりピンと来なかった。→削除
 - 喘息のお子さんの治療をしながら暮らすことで困ったこと、辛かったこと、不安なこと、「暮らし全体で」という投げかけに対して、治療そのものに関する情報が乏しかった。
→「暮らすこと全般」という投げかけのし方では治療にフォーカスしない。「お子さんの治療に関して困っていることや不安なことはありませんか？」と投げかける。
- [3. 望まれる情報とそのチャネル][4. 診療ガイドラインに載せて欲しい内容]
- 診療ガイドラインのユーザーが基本的には医師と想定するのならば、この質問は不要。
→これらは削除し、そのかわりに「患者が医者・病院に何を求めているか」「患者が医者に知っておいて欲しいことは何か」を探索する必要がある。

診療ガイドライン研究のための患者インタビュー

<喘息ガイドライン用パイロットスタディ>

インタビューフロー

- ウォームアップ
 対象者の家庭での当該児童の紹介(病歴などにはふれない)

1) グルイン主旨の説明

「今日は、喘息のお子様をお持ちのお母様をお招きして、喘息治療において現在お困りのことやこんな情報があればといったことをお伺いしたく座談会を開催いたしました。皆様がふだんお子様のケアをしながら、どのように感じているのか、どのようになさっているのか、こんな情報が足りないなど、率直なご意見をうかがいたいと思います。」

—研究主体の説明 調査実施機関 及び 司会者の紹介、話し合いのルール説明、速記とビデオの説明と了承

2) 自己紹介(簡単に)

—お母様の名前、もし有れば仕事内容や社会活動など

3) ウォームアップ: お子さんの状況

「あなたのお子さんの状況をお知らせ下さい。ご病気のことは後でたくさんお聞きしたいので普段の生活の様子を教えてください」

—年齢、性別、家族構成

—お子さんの好きなもの、性格など

2. お子さんの治療歴と現在困っていること 45分/計60分

- お子さんの病気の状況
 医療機関、学校、家庭 とのかかわりかた

1) お子さんの喘息の症状

「あなたのお子さんのご病気はいつ頃始まり今どのような状況ですか。簡単にお話し下さい」(1 ON 1)

—発症年齢、現在の症状

—通院状況

「毎日の生活の中で、お子さんが制約を受けていることは、今はどんなことですか。」

(Discussion)

—(確認)学校やご家庭では特別な処置などをされているか

2) 喘息の子どもと共に暮らすことで困ったこと、きがかかりなこと

「喘息のお子さんの治療をしながら共に暮らすことで困ったこと、つらかったことや、不安なこと、気がかりなことなどは、どんなことですか？」

—自由に話してもらう

※聞きながら司会者手許にカード作成、ステージ4で活用する。

※チェックポイント(自由想起である程度出してもらった後、状況に応じて以下の点について整理確認する。)

お医者さんとのこと(医療機関への信頼) / 家庭での毎日の生活 / 学校や保育園での生活 /

発作の対応、発作予防の方法 / 子供のメンタルな面・人間関係 / 子供の将来についてなど

□ どのような情報が喘息の子どもの抱えた母親のサポートになるのか

1) 望まれる情報チャネル

「これまでに『助かった』とか『使える』と思った情報はありますか。」

「それは、どのようなところからの、どのような情報でしたか。」

インターネット、同じ病気を持つ知人の話、患者会、TV番組、新聞・雑誌の記事、病院や保健所のパンフレット、
医者や看護師さんなど医療関係者から

「どのようなかたちで情報が得られたら良いですか？」

望まれるメディア（インターネット、冊子、電話でのヘルプライン、人的ネットワークなど）

2) 信頼できる情報

「あなたが最も信頼する情報は、どこからの情報ですか。」

「逆に、この情報は使えなかった、というのはどこからの、どのような情報でしたか。」

□ 小児喘息の患者さんにとってのガイドラインの方向性

1) 小児喘息の患者さんの手引書に考慮に入れて欲しい情報

「実は、本日、色々なお話をお伺いしたのは、「患者参加型医療のあり方に関する研究班」では、小児喘息に関する生活や治療の手引書を作りたいという背景があったからです。あなたのお子様のような喘息の患者さんのための手引書であれば、あなた自身が知りたいこととしては、どういうことを考慮し、載せて欲しいでしょうか」

自然想起

「先ほどお話しいただいた、普段お困りのことを考えながら、こんなことを載せて欲しい、ということをお話頂けますか」

※ステージ2-2)で作成した「困ったことカード」を示し、意見を問いつつ、患者の視点で優先順位をつけて整理してもらう。

2) 「では、お医者さんに知っておいてもらいたいと皆さんが感じることはどんなことですか？」

3) 小児喘息の患者さんの手引書として期待される発行元、体裁

「その手引書は、どのようなところから発行していれば良いと思いますか」

厚生労働省、医師の団体、患者会 など？

「どんな形・体裁だと良いと思いますか。」

本、パンフレット、WEBサイト など

既存の各種情報の評価と改善の方向性

<実は、「患者参加型医療のあり方に関する研究班」では、質の高い新しい情報に基づいてより良い医療を提供していくのに役立つ素材として『診療ガイドライン』というものを考えています。『診療ガイドライン』とは、特定の病気の標準的な診断や治療方針や暮らしの解説書のようなものです。患者さんにとって分かりやすいものを作りたいと思っています。>

「ここに、診療ガイドラインや色々なパンフレットの例があるので、ご覧下さい。」
「ご覧になっての印象はいかがですか」「どのようになったらもっと良くなると
思いますか」

※既存の成人喘息のガイドライン(専門医向け、一般臨床医向け、患者向
けの3種類)や、

パンフレットを見せて、自由に意見を挙げてもらう。

__不満点や評価点

__患者のためのガイドラインとして、求められている情報はどのようなこと
なのか。

日本医学会分科会誌 投稿規定調査結果

97学会 141誌の調査結果(うち和文誌85、欧文誌56)

項目	調査対象数	あり			なし		
		和文誌	欧文誌	計	和文誌	欧文誌	計
投稿規定	141	77	56	133	8	0	8

和文誌・欧文誌 項目別調査結果

項目	和文誌		欧文誌		計		χ ² 検定 P値
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	
1. 抄録の規定	73	4	56	0	129	4	0.013
2. 英文抄録の規定	72	5	56	0	128	5	
3. 構造化抄録を採用	10	67	19	37	29	104	0.007
内訳	項目数=3	0	1		1		
	項目数=4	8	18		26		
	項目数=5	2	0		2		
4. 統一投稿規定に準拠	6	71	22	34	28	105	0.000
内訳	1988年改訂	0	2		2		
	1991年改訂	1	0		1		
	1993年改訂	0	1		1		
	1997年改訂	2	14		16		
	2003年改訂	1	1		2		
	改訂年の明示なし	2	4		6		
5. 研究倫理について規定	43	34	49	7	92	41	0.001
5-1. 利害の衝突の記載	3		14		17		
5-2. ヘルシンキ宣言の記載	27		41		68		0.000
内訳	1975年改訂	0	5		5		
	1983年改訂	2	7		9		
	1989年改訂	1	1		2		
	1996年改訂	0	2		2		
	2000年改訂	6	8		14		
	2002年改訂	2	0		2		
	改訂年の明示なし	16	18		34		
5-3. IRBの承認	19		31		50		0.001
5-4. インフォームドコンセントの明示	11		20		31		0.007
5-5. ヒゲム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	2		0		2		0.622
5-6. 疫学研究に関する倫理指針	1		1		2		0.819
5-7. 臨床研究に関する倫理指針	0		0		0		
5-8. その他	6		0		6		
6. Animal Researchについて規定	30	47	42	14	72	61	0.000
7. Copyright帰属先の規定	61	16	42	14	103	30	0.752
8. チェックリストの有無	12	65	11	45	23	110	0.705

	誌名	学会名	言語	創刊年
1	Allergology International	日本アレルギー学会	英	1996
2	アレルギー	日本アレルギー学会	和	1951
3	Anatomical Science International	社団法人 日本解剖学会	英	2002
4	Annals of Nuclear Medicine	日本核医学会	英	1987
5	Auris Nasus Larynx	社団法人 日本耳鼻咽喉科学会	英	1974
6	BME : Bio Medical Engineering	日本エム・イー学会	和	1987
7	Brain & Development	日本小児神経学会	英	1979
8	病院管理	日本病院管理学会	和	1964
9	Cancer Science	日本癌学会	英	2003
10	超音波医学	社団法人 日本超音波医学会	和	1974
11	Circulation Journal	社団法人 日本循環器学会	英	2002
12	Clinical and Experimental Nephrology	社団法人 日本腎臓学会	英	1997
13	Congenital Anomalies	日本先天異常学会	英	1961
14	Digestive Endoscopy	社団法人 日本消化器内視鏡学会	英	1989
15	Digestive Surgery	有限責任中間法人 日本消化器外科学会	英	1984
16	Endocrine Journal	社団法人 日本内分泌学会	英	1993
17	Environmental Health and Preventive Medicine	日本衛生学会	英	1996
18	Geriatrics and Gerontology International	社団法人 日本老年医学会	英	2001
19	Hepatology Research	社団法人 日本肝臓学会	英	1997
20	医学教育	日本医学教育学会	和	1970
21	医科器械学	日本医科器械学会	和	1976
22	Internal Medicine	社団法人 日本内科学会	英	1992
23	International Immunology	日本免疫学会	英	1989
24	International Journal of Clinical Oncology	日本癌治療学会	英	1996
25	International Journal of Hematology	社団法人 日本血液学会	英	1991
26	International Journal of Urology	社団法人 日本泌尿器科学会	英	1994
27	医療情報学	日本医療情報学会	和	1982
28	移植	日本移植学会	和	1975
29	Japanese Journal of Leprosy (日本ハンセン病学会雑誌)	日本ハンセン病学会	和	1996
30	The Japanese Journal of Nephrology (日本腎臓学会雑誌)	社団法人 日本腎臓学会	和	1971
31	Japanese Journal of Ophthalmology	日本眼科学会	英	1957
32	The Japanese Journal of Physiology	日本生理学会	英	1950
33	Japanese Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery (日本胸部外科学会雑誌)	特定非営利活動法人 日本胸部外科学会	英	1998
34	Japanese Journal of Tropical Medicine and Hygiene→Tropical Medicine and Health	日本熱帯医学会	英	2004
35	人工臓器	日本人工臓器学会	和	1972
36	自律神経	日本自律神経学会	和	1964
37	Journal of Anesthesia	社団法人 日本麻酔科学会	英	1987
38	Journal of Artificial Organs	日本人工臓器学会	英	1998
39	Journal of Atherosclerosis and Thrombosis	日本動脈硬化学会	英	1994
40	Journal of Biochemistry	社団法人 日本生化学会	英	1922
41	Journal of Clinical and Experimental Hematopathology	日本リンパ網内系学会	英	2001
42	The Journal of Dermatology	社団法人 日本皮膚科学会	英	1974
43	Journal of Epidemiology	日本疫学会	英	1991
44	Journal of Gastroenterology	財団法人 日本消化器病学会	英	1994
45	Journal of Human Genetics	日本人類遺伝学会	英	1998
46	Journal of Infection and Chemotherapy (日本化学療法学会との共同編集)	社団法人 日本感染症学会	英	1995
47	Journal of Medical Ultrasonics	社団法人 日本超音波医学会	英	2001
48	Journal of Nutritional Science and Vitaminology	日本栄養・食糧学会	英	1973
49	The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research	社団法人 日本産科婦人科学会	英	1996
50	Journal of Occupational Health	社団法人 日本産業衛生学会	英	1996
51	Journal of Orthopaedic Science	社団法人 日本整形外科学会	英	1996
52	Journal of Pharmacological Sciences	社団法人 日本薬理学会	英	2003
53	Journal of Smooth Muscle Research	日本平滑筋学会	英	1991
54	Journal of Smooth Muscle Research, Japanese Section	日本平滑筋学会	和	1997
55	Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases	日本脳卒中学会	英	1991
56	循環器専門医	社団法人 日本循環器学会	和	1993
57	解剖学雑誌(Acta Anatomica Nipponica)	社団法人 日本解剖学会	和	1928
58	核医学	日本核医学会	和	1964
59	感染症学雑誌	社団法人 日本感染症学会	和	1970
60	肝臓	社団法人 日本肝臓学会	和	1960
61	結核	日本結核病学会	和	1948
62	交通医学	日本交通医学会	和	1947
63	矯正医学	日本矯正医学会	和	1952
64	Legal Medicine	日本法医学会	英	1999
65	麻酔	社団法人 日本麻酔科学会	和	1952
66	Medical Entomology and Zoology	日本衛生動物学会	和	1950
67	Microbiology & Immunology (他学会との共同編集)	日本ウイルス学会	英	1977
68	民族衛生	日本民族衛生学会	和	1931
69	MODERN RHEUMATOLOGY	有限責任中間法人 日本リウマチ学会	英	2000
70	脈管学	日本脈管学会	和	1961
71	Neurologia Medico-Chirurgica	日本脳神経外科学会	英	1979
72	Neuropathology	日本神経病理学会	英	1993

	誌名	学会名	言語	創刊年
73	日本病理学会誌	社団法人 日本病理学会	和	1911
74	日本大腸肛門病学会雑誌	日本大腸肛門病学会	和	1967
75	日本衛生学雑誌	日本衛生学会	和	1904
76	日本栄養・食糧学会誌	日本栄養・食糧学会	和	1983
77	日本不妊学会雑誌	社団法人 日本不妊学会	和	1956
78	日本癌治療学会誌	日本癌治療学会	和	1966
79	日本眼科学会雑誌	日本眼科学会	和	1891
80	日本外科学会雑誌	社団法人 日本外科学会	和	1899
81	日本皮膚科学会雑誌	社団法人 日本皮膚科学会	和	1957
82	日本泌尿器科学会雑誌	社団法人 日本泌尿器科学会	和	1928
83	日本法医学雑誌	日本法医学会	和	1944
84	日本保険医学会誌	日本保険医学会	和	1971
85	日本医学放射線学会雑誌	社団法人 日本医学放射線学会	和	1940
86	日本医史学雑誌	日本医史学会	和	1941
87	日本医真菌学会雑誌	日本医真菌学会	和	1990
88	日本耳鼻咽喉科学会会報	社団法人 日本耳鼻咽喉科学会	和	1947
89	日本化学療法学会雑誌	社団法人 日本化学療法学会	和	1995
90	日本形成外科学会誌	社団法人 日本形成外科学会	和	1981
91	日本気管食道科学会会報	日本気管食道科学会	和	1950
92	日本口腔科学会雑誌	日本口腔科学会	和	1967
93	日本呼吸器学会雑誌	日本呼吸器学会	和	1998
94	日本呼吸器外科学会雑誌	日本呼吸器外科学会	和	1987
95	日本公衆衛生雑誌	日本公衆衛生学会	和	1954
96	日本救急医学会雑誌	日本救急医学会	和	1990
97	日本リンパ網内系学会誌	日本リンパ網内系学会	和	1997
98	日本内分泌学会雑誌	社団法人 日本内分泌学会	和	1927
99	日本内科学会雑誌	社団法人 日本内科学会	和	1913
100	日本農村医学会雑誌	社団法人 日本農村医学会	和	1952
101	日本温泉気候物理医学会雑誌	日本温泉気候物理医学会	和	1962
102	日本老年医学会雑誌	社団法人 日本老年医学会	和	1964
103	日本細菌学雑誌	日本細菌学会	和	1944
104	日本産科婦人科学会雑誌	社団法人 日本産科婦人科学会	和	1949
105	日本整形外科学会雑誌	社団法人 日本整形外科学会	和	1927
106	日本生理学雑誌	日本生理学会	和	1931
107	日本心臓血管外科学会雑誌	日本心臓血管外科学会	和	1975
108	日本消化器病学会雑誌	財団法人 日本消化器病学会	和	1902
109	日本消化器外科学会雑誌	有限責任中間法人 日本消化器外科学会	和	1969
110	日本消化器内視鏡学会雑誌	社団法人 日本消化器内視鏡学会	和	1973
111	日本職業・災害医学会誌	日本職業・災害医学会	和	2000
112	日本小児外科学会雑誌	日本小児外科学会	和	1965
113	日本小児科学会雑誌	社団法人 日本小児科学会	和	1951
114	日本集中治療医学会雑誌	日本集中治療医学会	和	1994
115	日本周産期・新生児医学会雑誌	有限責任中間法人 日本周産期・新生児医	和	1965
116	日本東洋医学雑誌	社団法人 日本東洋医学会	和	1950
117	日本薬理学雑誌	社団法人 日本薬理学会	和	1944
118	日本輸血学会雑誌	日本輸血学会	和	1958
119	脳卒中	日本脳卒中学会	和	1979
120	脳と発達	日本小児神経学会	和	1969
121	Parasitology International	日本寄生虫学会	英	1997
122	Pathology International	社団法人 日本病理学会	英	1994
123	Pediatric Surgery International	日本小児外科学会	英	1986
124	Pediatrics International	社団法人 日本小児科学会	英	1999
125	Radiation Medicine	社団法人 日本医学放射線学会	英	1983
126	リハビリテーション医学	社団法人 日本リハビリテーション医学会	和	1964
127	Reproductive Medicine and Biology	社団法人 日本不妊学会	英	2002
128	Respirology(他学会との共同編集)	日本呼吸器学会	英	1996
129	臨床病理	日本臨床検査医学会	和	1953
130	臨床神経学	日本神経学会	和	1960
131	臨床薬理	日本臨床薬理学会	和	1970
132	産薬衛生学雑誌	社団法人 日本産薬衛生学会	和	1995
133	Scandinavian Journal of Plastic & Reconstructive Surgery and Hand Surgery(Taylor & Francis. との共同発行)	社団法人 日本形成外科学会	英	1987
134	生化学	社団法人 日本生化学会	和	1948
135	精神神経学雑誌	日本精神神経学会	和	1935
136	生体医工学	日本エム・イー学会	和	2002
137	心身医学	社団法人 日本心身医学会	和	1976
138	Surgery Today	社団法人 日本外科学会	英	1992
139	体力科学	日本体力医学会	和	1950
140	糖尿病	社団法人 日本糖尿病学会	和	1958
141	ウイルス	日本ウイルス学会	和	1958

<資料>

国内の医学系学術誌における投稿規定と EBM への対応に関する調査

目的:

日本の代表的学会誌の統一投稿規程や EBM への対応から、国内誌におけるより質の高い論文投稿への取り組みについての現状を調査する。

対象:

日本医学会分科会一覧 (<http://www.med.or.jp/jams/bunkakai/bunkakaiichiran.html>) の 2004 年3月のデータで確認した 97 学会を対象とした。各学会の機関誌名については財団法人国際医学情報センターが作成・公開している「学会・研究会総覧データベース」 (<http://www3.imic.or.jp/gakkai/gakkai.htm>) 等を利用して調査した。ニューズレター、講演集等、投稿論文を受け付けていないもの、編集部が海外に置かれているもの等を除外し、131 誌を対象とした。

言語による内訳は、和文 77 誌、英文 54 誌であった。なお、対象誌のうち MEDLINE 収載誌は全体では 72 誌 (54.9%)、英文誌に限ると 54 誌中 42 誌 (77.7%) が収載誌であった。

方法:

質問票形式の調査票を作成し、対象 131 誌の編集部へ返信用封筒とともに郵送した。質問項目は「統一投稿規定」「構造化抄録」「EBM に関する声明類」「利害の衝突」の問題を柱とした全 29 項目とし、このうち 2 項目は和文誌のみを対象とした。なお、回答者の編集上の立場を把握するために回答者名記載の欄を設けた。締切日は約 1 カ月後とし、その時点で未回答の学会についてはリマインド調査を行った。

結果と考察:

当初の締切日で 72 件 (54.9%) の回答があり、未回答の 59 件に対してリマインド調査を行った。最終的に回答が得られたのは 131 誌中 97 誌 (74.0%) であり、このうち和文誌は 56 誌、英文誌は 41 誌であった。回答者の編集上の立場としては、編集長またはそれに準ずる立場の担当者が 85 件、事務担当者が 9 件、特に明記していないものが 3 件あった。

学会によっては、和文誌と英文誌の編集を兼任している場合があるため、同一名による回答が複数みられた (9 学会、18 回答)。

以下に各質問項目の結果をまとめた。

1. 主体となっている論文について

学会誌が扱っているレビュー・論説以外の研究論文の内容について尋ねた。この質問はその内容から複数回答を可とした。回答結果は多い順に「症例報告」72 誌、「臨床試験以外の臨床研究」66 誌、「人間の試料を用いた基礎研究」58 誌、「動物実験」51 誌、「臨床以外での疫学研究」38 誌、「臨床試験(治験含む)」35 誌となった。この他、選択肢が無かったとして無回答が 1 誌あった。

2. 統一投稿規程の認知度、採用状況等について

回答結果は「実物を知っている」32 誌(33.0%)、「聞いたことはあるが実物は見たことがない」48 誌(49.5%)と、非常に高い認知度が示された。しかし、2003 年 11 月の改訂について「知っている」と回答したのは 20 誌(20.6%)にとどまった。統一投稿規定の採用状況については「すでに採用している」19 誌(19.6%)、「採用が決定している」1 誌(1.0%)であった。この数字は改訂版の認知度と同じであり、ほぼ同一の回答者層であると思われる。統一投稿規程の採用を「当面検討しない」とした回答の中には、「教育研究のため(生物医学雑誌とは)質が異なる」「総説のみを扱っているため」などの理由を挙げているものがあつた。

3. 構造化抄録の認知度、採用状況等について

IMRAD については 56 誌(57.7%)が「知っている」という回答であったが、原著論文に対する 8 項目形式、レビュー論文に対する 6 項目形式について認知していたという回答はそれぞれ 9 誌(9.3%)、7 誌(7.2%)といずれも低かつた。採用状況としては「すでに採用している」27 誌(27.8%)と「採用が決定している」3 誌(3.1%)を併せると 3 割近くあり、3 年前の調査に比し、構造化抄録が着実に浸透していることがうかがえた。

「構造化抄録によって論文情報の質が向上するか」という質問に対しては、「そう思う」と全面的に肯定したものは 21 誌(21.6%)と採用率を下回り、「どちらかというと思う」という回答 26 誌(26.8%)と併せても過半数に満たなかつた。

「構造化抄録の採用によって本文が読まれる機会が減る」という考え方については、「本文が読まれる機会が減ることは問題」と回答したのは 2 誌(2.1%)のみで、「本文が読まれる機会が減るとは思わない」との回答が 53 誌(54.6%)にのぼり、「本文が読まれる機会が減るかもしれないが、特に問題ではない」22 誌(22.7%)がこれに次ぎ、ほとんど問題視されていなかつた。

構造化抄録に対する意見について自由記載の回答欄を設けたが、「基礎的研究に関する論文には向いていない」「論文の内容により、適合性が良くない場合もありうる」「症例報告、資料、総説などにはそぐわない」など、論文の内容によって構造化抄録は向いていないという意見が複数みられた。

4. EBM に関する声明認知度について

「CONSORT 声明」「QUOROM 声明」「MOOSE 声明」「STARD 声明」「COPE ガイドライン」について認知の有無を質問した。「実物を知っている」という回答は CONSORT 声明において 13

誌(13.4%)を示した他は、いずれも一桁の数値であった。しかし、それぞれの関心の有無についての質問には、いずれにおいても「大いにある」「ある」とした回答が併せて過半数を占めた。また、これら EBM に関する各種の声明類について実物を知りたいという要望が直接回答者から寄せられた例もあり、関心度の高さが実感された。

5. 利害の衝突について

研究論文の査読・掲載に際して「利害の衝突」の問題について、「重視している」との回答は「大いに重視している」と併せて 30 誌(30.1%)に達したが、この問題の対策について投稿規程に記述しているかという質問に「すでに記述している」と回答したのは 11 誌(11.3%)のみであった。この数字は統一投稿規定の採用率に比してかなり下回っており、統一投稿規程には「利害の衝突」が明記されているにもかかわらず、その対策については、まだ不十分な状況であるといえる。

6. 学術情報流通に係わる国内誌の課題について

「国内では依頼原稿中心の商業誌が多すぎる」という指摘については、「多すぎる」ことを基本的に認めつつ、これを「望ましいことではない」とする回答 25 誌(25.8%)よりも、「仕方がない」する回答が 37 誌(38.1%)と上回った。「特に多いとは思わない」とした回答も 31 誌(32.0%)あり、結果的には 3 つの意見に分かれた形となった。

「質の高い研究が、英語論文として書かれる傾向が強まると、日本語の学術情報が空洞化する」という意見に対しては、半数以上の 51 誌(52.6%)が「特に問題はない」と回答しており、「問題はあるが日本から英語論文が増えることは良い」40 誌(41.2%)がこれに次ぎ、「何らかの対策が必要である」としたのは 6 誌(6.2%)のみであった。

7. 和文誌の内容について

「日本語の学会誌における今後の総説・解説と原著論文の比重」については、「原著論文を積極的に掲載する」とする回答が 31 誌(55.4%)あり、「総説や解説に重点を置き、原著論文は積極的に掲載しない」とするものは 3 誌(5.4%)のみであった。この結果からみるとまだ原著論文の比重は大きいようである。しかし、「その他」の中には「和文誌は廃刊の方向に」という回答もあったことから、和文誌の数そのものが減少していく可能性もうかがえた。

2001 年 10 月の改訂版統一投稿規定では「英文で発表した論文を日本語論文として再発表する」ことは、一定の条件を満たせば「受理可能な二次出版」として正当であると見なされているが、これを「積極的に受け入れる方向で検討したい」とした回答は 7 誌(12.5%)であった(「すでに行っている」としたもの 2 誌を含む)。一方、「好意的には検討することはできない」とする意見も同数あった。その理由として「(統一投稿規定上で条件とされているものは)著作権上での了解事項に過ぎず、本質的には二重出版である」「一度発表された論文を発表すれば、自誌の価値を下げることになる」「本誌では原著論文のみを扱っているため」などの意見が挙げられて

いる。

なお、無回答ながらも、「英文で発表した論文を日本語論文として再発表する」ことよりも、「日本語論文を統一投稿規定の条件にあてはめて英文雑誌に採用するか否かが問題」ということが記載されており、注目すべき意見と思われる。

最後に、本調査に対する印象としては「興味深かった」「たいへん興味深かった」の回答が併せて47誌と6割近くを占め、また、回収率も高く、本調査内容への関心の高さがうかがえた。

今後はさらに、「EBMを指向した診療ガイドライン」、「データベースに利用される構造化抄録」作成の方法の一つとして、根拠となる学術情報の質の向上を学会主導で提唱していく必要性を認識することが重要であると思われる。

協力：国際医学情報センター (IMIC)

「医学系学術誌における投稿規定・EBM(根拠に基づく医療)への対応に関する調査」集計結果

	和	洋	計
手配件数	77	54	131
回答件数	56 (72.7%)	41 (75.9%)	97 (74.0%)

1 レビュー・論説以外の研究論文で、貴誌の主体となっている内容をお教え下さい(いくつでも可)

1 動物実験	和	英	計
2 人間の試料を用いた基礎研究	23	28	51
3 症例報告	28	30	58
4 臨床試験(治験含む)	39	33	72
5 臨床試験以外の臨床研究	19	16	35
6 臨床以外での疫学研究	39	27	66
(その他)	21	17	38
	1	0	1

2 「生物医学雑誌への統一投稿規定」をご覧になったことがありますか？

1 実物(原文、日本語訳のどちらでも)を知っている。	和	英	計
2 聞いたことはあるが、実物は見たことが無い	19 (33.9%)	13 (31.7%)	32 (33.0%)
3 聞いたことが無い	26 (46.4%)	22 (53.7%)	48 (49.5%)
	11 (19.6%)	6 (14.6%)	17 (17.5%)

3 「生物医学雑誌への統一投稿規定」が2003年11月に改定されたことをご存知ですか？

1 知っている	和	英	計
2 知らない	7 (12.5%)	13 (31.7%)	20 (20.6%)
	49 (87.5%)	28 (68.3%)	77 (79.4%)

4 「生物医学雑誌への統一投稿規定」は、論文の抄録形式として「構造化抄録」を薦めていることをご存知ですか？

1 知っている	和	英	計
2 知らない	28 (50.0%)	22 (5.3%)	50 (51.5%)
	28 (50.0%)	19 (46.3%)	47 (48.5%)

5 貴誌で「生物医学雑誌への統一投稿規定」採用のご予定はありますか？

	和	英	計
1 すでに採用している	7 (12.5%)	12 (29.3%)	19 (19.6%)
2 採用が決定している	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)
3 現在検討中	4 (7.1%)	1 (2.4%)	5 (5.2%)
4 今後検討したい	36 (64.3%)	26 (63.4%)	62 (63.9%)
5 当面検討しない: 宜しければその理由をお教え下さい。 (無回答)	6 (10.7%)	2 (4.9%)	8 (8.2%)
	2 (3.6%)	0 (0.0%)	2 (2.1%)

5の理由

- 「本誌は総説のみを扱う雑誌であるため」
- 「生物医学雑誌への統一投稿規定について知らない」
- 「教育研究のため質が異なる」

6 「構造化抄録」として下記の形式のものをご存知ですか？

(6-1) IMRAD形式 (Introduction, Methods, Results and Discussion, またはそのバリエーション)

	和	英	計
1 知っている	31 (55.4%)	25 (61.0%)	56 (57.7%)
2 知らない (無回答)	25 (44.6%)	15 (36.6%)	40 (41.2%)
	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1 (1.0%)

(6-2) 原著論文に対する8項目形式 (Haynesらの提案)

	和	英	計
1 知っている	6 (10.7%)	3 (7.3%)	9 (9.3%)
2 知らない (無回答)	50 (89.3%)	37 (90.2%)	87 (89.7%)
	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1 (1.0%)

(6-3) レビュー論文に対する6項目形式 (Haynesらの提案)

	和	英	計
1 知っている	4 (7.1%)	3 (7.3%)	7 (7.2%)
2 知らない (無回答)	52 (92.9%)	37 (90.2%)	89 (91.8%)
	0 (0.0%)	1 (2.4%)	1 (1.0%)

7 貴誌で「構造化抄録」採用のご予定はありますか？

	和	英	計
1 すでに採用している	13 (23.2%)	14 (34.1%)	27 (27.8%)
2 採用が決定している	2 (3.6%)	1 (2.4%)	3 (3.1%)
3 現在検討中	5 (8.9%)	2 (4.9%)	7 (7.2%)
4 今後検討したい	31 (55.4%)	21 (51.2%)	52 (53.6%)
5 当面検討しない： 直しければその理由をお教え下さい。(無回答)	3 (5.4%)	3 (7.3%)	6 (6.2%)
	2 (3.6%)	0 (0.0%)	2 (2.1%)

5の理由

「総説(解説記事)を取り扱うものであるため」

「必ずしも関連有名国際誌がこの形式を採用していないこと、と併せ必ずしもこの構造化が抄録目的とその理解を高めているとは思われない。今後の検討課題ではあるが関連国際誌の動向をしばらく見守りたい」

8 貴誌の扱うテーマでは、「構造化抄録」によって論文情報の質が向上すると思われませんか？

	和	英	計
1 そう思う	12 (21.4%)	9 (22.0%)	21 (21.6%)
2 どちらかというとそう思う	15 (26.8%)	11 (26.8%)	26 (26.8%)
3 どちらとも言えない	21 (37.5%)	17 (41.5%)	38 (39.2%)
4 どちらかというとそう思わない	3 (5.4%)	3 (7.3%)	6 (6.2%)
5 そう思わない(無回答)	2 (3.6%)	0 (0.0%)	2 (2.1%)
	3 (5.4%)	1 (2.4%)	4 (4.1%)

9 『「構造化抄録」を採用すると、本文が読まれる機会が減ってしまう』という考えがありますが、編集の立場から、どう思われますか？

	和	英	計
1 本文が読まれる機会が減ることは問題。	0 (0.0%)	2 (4.9%)	2 (2.1%)
2 本文が読まれる機会が減るかもしれないが、特に問題ではない。	11 (19.6%)	11 (26.8%)	22 (22.7%)
3 本文が読まれる機会が減ると思わない。	34 (60.7%)	19 (46.3%)	53 (54.6%)
4 特に意見は無い(無回答)	8 (14.3%)	8 (19.5%)	16 (16.5%)
	3 (5.4%)	1 (2.4%)	4 (4.1%)

「構造化抄録」について、ご意見がありましたらご自由にお書き下さい。

編集委員は本抄録について知っていると、編集委員会で議論されたことは無い。本抄録の入手方法について知りたい。論文の内容により、適合性が良くない場合もありうる。基礎的研究に関する論文には向いていないような印象があります。症例報告についてはフォーマットに従うと不自然なものになりがちな点について検討が必要と考えている。原著論文は構造化抄録とした。症例報告、資料、総説などは構造化抄録としない。(そぐわない) 検討事項(構造化抄録)について把握できていないので意見を出せない。

10 EBM(根拠に基づく医療)に関連する次の声明(statements)をご存知ですか？

(10-1) CONSORT声明

	和	英	計
1 実物を知っている。	7 (12.5%)	6 (14.6%)	13 (13.4%)
2 聞いたことはあるが、実物は見たことが無い	16 (28.6%)	16 (39.0%)	32 (33.0%)
3 聞いたことが無い (無回答)	32 (57.1%)	19 (46.3%)	51 (52.6%)
	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)

CONSORT声明とは、ランダム化比較試験の論文で記述すべきポイントを提案したものです。CONSORT声明に関心がおありですか？

	和	英	計
1 大いにある	7 (12.5%)	6 (14.6%)	13 (13.4%)
2 ある	29 (51.8%)	18 (43.9%)	47 (48.5%)
3 どちらとも言えない	10 (17.9%)	9 (22.0%)	19 (19.6%)
4 あまり無い	5 (8.9%)	4 (9.8%)	9 (9.3%)
5 無い (無回答)	4 (7.1%)	3 (7.3%)	7 (7.2%)
	1 (1.8%)	1 (2.4%)	2 (2.1%)

(10-2) QUOROM声明

	和	英	計
1 実物を知っている。	4 (7.1%)	3 (7.3%)	7 (7.2%)
2 聞いたことはあるが、実物は見たことが無い	12 (21.4%)	6 (14.6%)	18 (18.6%)
3 聞いたことが無い (無回答)	39 (69.6%)	32 (78.0%)	71 (73.2%)
	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)

QUOROM声明とは、ランダム化比較試験のメタ・アナリシス論文で記述すべきポイントを提案したものです。QUOROM声明に関心がおありですか？

	和	英	計
1 大いにある	6 (10.7%)	3 (7.3%)	9 (9.3%)
2 ある	29 (51.8%)	18 (43.9%)	47 (48.5%)
3 どちらとも言えない	12 (21.4%)	11 (26.8%)	23 (23.7%)
4 あまり無い	5 (8.9%)	5 (12.2%)	10 (10.3%)
5 無い (無回答)	3 (5.4%)	4 (9.8%)	7 (7.2%)
	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)

(10-3) MOOSE声明

1 実物を知っている。	和	3 (5.4%)	英	2 (4.9%)	計	5 (5.2%)
2 聞いたことはあるが、実物は見たことが無い		10 (17.9%)		8 (19.5%)		18 (18.6%)
3 聞いたことが無い (無回答)		42 (75.0%)		31 (75.6%)		73 (75.3%)
		1 (1.8%)		0 (0.0%)		1 1.0%

MOOSE声明とは観察研究のメタ・アナリシス論文で記述すべきポイントを提案したものです。MOOSE声明に関心がおありですか？

1 大いにある	和	5 (8.9%)	英	2 (4.9%)	計	7 (7.2%)
2 ある		30 (53.6%)		19 (46.3%)		49 (50.5%)
3 どちらとも言えない		11 (19.6%)		10 (24.4%)		21 (21.6%)
4 あまり無い		5 (8.9%)		6 (14.6%)		11 (11.3%)
5 無い (無回答)		4 (7.1%)		4 (9.8%)		8 (8.2%)
		1 (1.8%)		0 (0.0%)		1 1.0%

(10-4) STARD声明

1 実物を知っている。	和	0 (0.0%)	英	2 (4.9%)	計	2 (2.1%)
2 聞いたことはあるが、実物は見たことが無い		14 (25.0%)		5 (12.2%)		19 (19.6%)
3 聞いたことが無い (無回答)		41 (73.2%)		34 (82.9%)		75 (77.3%)
		1 (1.8%)		0 (0.0%)		1 1.0%

STARD声明とは診断に関する論文で記述すべきポイントを提案したものです。STARD声明に関心がおありですか？

1 大いにある	和	5 (8.9%)	英	4 (9.8%)	計	9 (9.3%)
2 ある		28 (50.0%)		19 (46.3%)		47 (48.5%)
3 どちらとも言えない		12 (21.4%)		8 (19.5%)		20 (20.6%)
4 あまり無い		7 (12.5%)		7 (17.1%)		14 (14.4%)
5 無い (無回答)		3 (5.4%)		3 (7.3%)		6 (6.2%)
		1 (1.8%)		0 (0.0%)		1 1.0%

(10-5) COPEガイドライン

- 1 実物を知っている。
- 2 聞いたことはあるが、実物は見たことが無い
- 3 聞いたことが無い
(無回答)

和	英	計
1 (1.8%)	2 (4.9%)	3 (3.1%)
16 (28.6%)	9 (22.0%)	25 (25.8%)
38 (67.9%)	30 (73.2%)	68 (70.1%)
1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)

COPEガイドラインとは、欧州を中心とした生物医学雑誌の編集者による研究・出版の倫理ガイドラインです。COPEガイドラインに関心がおありですか？

和	英	計
9 (16.1%)	4 (9.8%)	13 (13.4%)
28 (50.0%)	22 (53.7%)	50 (51.5%)
11 (19.6%)	8 (19.5%)	19 (19.6%)
6 (10.7%)	5 (12.2%)	11 (11.3%)
1 (1.8%)	2 (4.9%)	3 (3.1%)
1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)

11 貴誌では、研究論文の査読・掲載に際して「利害の衝突」の問題を重視されていますか？

- 1 大いに重視している
- 2 重視している
- 3 あまり重視していない
- 4 ほとんど重視していない
- 5 その他

和	英	計
1 (1.8%)	1 (2.4%)	2 (2.1%)
14 (25.0%)	14 (34.1%)	28 (28.9%)
29 (51.8%)	17 (41.5%)	46 (47.4%)
9 (16.1%)	8 (19.5%)	17 (17.5%)
3 (5.4%)	1 (2.4%)	4 (4.1%)

12 「利害の衝突」問題の対策を投稿規程に記述されていますか？

- 1 すでに記述している
- 2 記述することが決定している
- 3 現在検討中
- 4 今後検討したい
- 5 当面検討しない； 宜しければその理由をお教え下さい。

和	英	計
5 (8.9%)	6 (14.6%)	11 (11.3%)
1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)
4 (7.1%)	8 (19.5%)	12 (12.4%)
41 (73.2%)	25 (61.0%)	66 (68.0%)
5 (8.9%)	2 (4.9%)	7 (7.2%)

5の理由

- 「これまで問題になっていない」
- 「日本語誌ではあまり問題にならないように思う」
- 「本誌は総説等が主なもので、原著論文はほとんど無い」
- 「教育では利害の衝突が少ない」
- 「問題(利害の衝突)を把握できていない」

- 13 「国内では、依頼原稿中心の商業誌が多過ぎる」と言う指摘があります。質の高い学術情報を広く流通させる視点から、これについてどう思われますか？
- | | 和 | 英 | 計 |
|-------------------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 多過ぎると思う。望ましいことではない。 | 11 (19.6%) | 14 (34.1%) | 25 (25.8%) |
| 2 多過ぎると思うが、仕方がない。 | 23 (41.1%) | 14 (34.1%) | 37 (38.1%) |
| 3 特に多いとは思わない。 | 20 (35.7%) | 11 (26.8%) | 31 (32.0%) |
| 4 その他：宜しければその理由をお教え下さい。 | 2 (3.6%) | 2 (4.9%) | 4 (4.1%) |

4の理由

「論文の質が異なるので何とも言えない」

「実態を把握できていない。過去の出版経験から述べれば、依頼しなければ良い原稿が集まらなかったが、依頼しなくとも集まるものか？」

- 14 「質の高い研究が、英語論文として書かれる傾向が強まると、日本語の学術情報が空洞化する」という考えがあります。これについてどう思われますか？
- | | 和 | 英 | 計 |
|-------------------------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 問題であり、何らかの対策が必要 | 3 (5.4%) | 3 (7.3%) | 6 (6.2%) |
| 2 問題はあるが、日本からの英語論文が増えることは良い | 28 (50.0%) | 12 (29.3%) | 40 (41.2%) |
| 3 特に問題ではなく、日本からの英語論文が増えることは良い | 25 (44.6%) | 26 (63.4%) | 51 (52.6%) |
| 4 その他：宜しければ具体的にお教え下さい。 | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) |

2の具体的回答

「残念ながら日本語論文は極めて軽く扱われる傾向がある。英文誌、邦文誌の差は読者からの反応の差であり、それをもって何らかの資格審査をする人達の意識の差の表れであろう」
「質の高い商業誌ができればよい」

- 15 (日本語誌のご担当の場合にお答え下さい)
日本語の学会誌における今後の総説・解説と原著論文の比重について、お考えをお聞かせ下さい。

	和	英	計
1 総説や解説に重点を置き、原著論文は積極的に掲載しない	3 (5.4%)	3 (5.4%)	3 (5.4%)
2 総説や解説に重点を置くが、原著論文も掲載する	17 (30.4%)	17 (30.4%)	17 (30.4%)
3 原著論文を積極的に掲載する	31 (55.4%)	31 (55.4%)	31 (55.4%)
4 その他：宜しければ具体的にお教え下さい。 (無回答)	4 (7.1%)	4 (7.1%)	4 (7.1%)
	1 (1.8%)	1 (1.8%)	1 (1.8%)

3の具体的回答

「国内の事情と欧米の事情とは異なっており、本邦での臨床成績や情報を学会員に伝えるのは本誌の重要な使命であると考えます」

4の具体的回答

「総説や解説も掲載し、原著論文も掲載する」
「原著論文は別の雑誌で扱っている」
「日本語原著の投稿論文が多い学会誌です」
「和文誌廃刊の方向」

- 16 (日本語誌のご担当の場合にお答え下さい)

研究論文の「受理可能な2次出版 (acceptable secondary publication)」の一つに、英語で発表した内容を、日本語論文として再発表することが含まれます。これは「2重投稿 (duplicate submission)」や「2重出版 (redundant or duplicate publication)」と異なり、一定の要件を満たせば有益なものとされています。

既に英文で発表した内容を、日本語論文として再発表するため要件の代表的なものは下記の通りです。

- (1) 筆者が両方の雑誌編集者から承認を得て、2次出版を行なう編集者は、オリジナル版のコピー(または別刷、原稿内容)を保持する。
- (2) 2次出版を行なう雑誌では、論文に「この論文は～く言語情報」で最初に報告された研究に基づいている」ことを明記する

このような要件を認めて、日本人が英文で発表した論文を貴誌が日本語で再発表することはどう考えられますか？
(注……統一投稿規程は「先に論文を掲載した雑誌からの承認は無料であるべき」と記述しています)

1 積極的に受け容れる方向で検討したい	和	7 (12.5%)	計	7 (12.5%)	(「既に行っている」2件を含む)
2 受け容れる方向で検討したい	15 (26.8%)	15 (26.8%)		15 (26.8%)	
3 現時点では何とも言えない	26 (46.4%)	26 (46.4%)		26 (46.4%)	
4 好意的には検討できない: 宜しければその理由をお教え下さい (無回答)	7 (12.5%)	7 (12.5%)		7 (12.5%)	
	1 (1.8%)	1 (1.8%)		1 (1.8%)	

4の理由

「上記承認事項は著作権上の了解事項に過ぎないのでは。つまり、本質的には二重出版である(翻訳と同じと言えるかと思いますが)」

「新しい知見のPriorityの問題である」

「既に英文で発表したらそれでOKです。後は総説や学会発表で十分だと思います」

「原則として本誌では原著論文のみを扱っている」

「一度発表された論文を自誌で発表すれば、自誌の価値を下げることになる」

(無回答として添えられた意見)

「この逆が問題ではないでしょうか。すなわち日本語論文を上記のUniform requirementsの条件にあてはめて英文雑誌に採用するか否かが問題と考えます」

本調査に対する印象はいかがでしたでしょうか？

1 大変興味深かった	和	7 (12.5%)	英	2 (4.9%)	計	9 (9.3%)
2 興味深かった	28 (50.0%)	28 (50.0%)	19 (46.3%)	19 (46.3%)	47 (48.5%)	
3 どちらともいえない	12 (21.4%)	12 (21.4%)	11 (26.8%)	11 (26.8%)	23 (23.7%)	
4 あまり興味を感じなかった	5 (8.9%)	5 (8.9%)	6 (14.6%)	6 (14.6%)	11 (11.3%)	
5 興味を感じなかった (無回答)	3 (5.4%)	3 (5.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (3.1%)	
	1 (1.8%)	1 (1.8%)	3 (7.3%)	3 (7.3%)	4 (4.1%)	

意見

「ここにあげられたStructured Abstractの種々の形式、EBMに関するいくつかの声明、ガイドライン、利害の衝突などの内容をほとんど知りません。原文を入力するにはどうすればよいのかお教え願います」

「できれば知らないことについて情報をいただければ有難いです」

「アンケートの目的が明確でない」

「新任のため問題を把握できていないので、資料があればご送付下さい」